

「エンド・オブ・ザ・ワールド」★★★★

2013（平成25）年1月18日鑑

賞<テアトル梅田>

監督・脚本：ローリーン・スカファリア

ドッジ（保険セールスマン、妻に置き去りにされた男性）／スティーヴ・カレル

ペニー（ドッジの隣の家に住む女性）／キーラ・ナイトレイ

ダイアン／コニー・ブリットン

オーウェン／アダム・プロディ

ウォレン／ロブ・コードリー

ケイティ／ジリアン・ジェイコブズ

スペック／デレク・ルーク

カレン／メラニー・リンスキー

ダーシー／T・J・ミラー

ニュースキャスター／マーク・モーゼス

トラック運転手／ウィリアム・ピーターセン

2012年・アメリカ映画・101分

配給／ミッドシップ、ツイン

<地球滅亡の日まで、この主人公たちは？>

『アンチクライスト』（09年）で、カンヌはもとより私を騒然とさせたデンマークの奇オラス・フォン・トリアー監督が、ワグナーの『トリスタンとイゾルデ』にのせて縦横無尽にその世界観を展開した映画が『メランコリア』（11年）だった。地球に近づく惑星メランコリアは「5日後に通過し、地球に衝突することはない」との説明に安心していたのに、さて、同作にみる現実（『シネマルーム28』169頁参照）？

最後までホントに地球に衝突するのかがどうか不明だった「メランコリア」に対し、本作では映画冒頭、地球に接近している小惑星「マチルダ」との衝突を避けるための破壊作戦が失敗したため、3週間後の、地球滅亡＝人類滅亡は避けられないことが告げられる。そんな事態になったら、地球各地の人々の反応は？これをシリアスに考えると、あちこちで暴動と略奪、殺し合いが起こり、まさに地球が地獄絵図と化すことが予測されるが、本作が面白いのは地球と人類の滅亡をそんなに深刻に考えない（？）保険セールスマン、ドッジ（スティーヴ・カレル）と、ちょっと奇妙な性癖の持ち主である（？）、隣人のペニー（キーラ・ナイトレイ）の2人を主人公に設定したこと。コトがここまで至ったとき、政府はホントにそんな正直な情報をそのまま発表するの？そんな疑問がないわけではないが、そんなことを言い始めるとまったく別の映画になってしまう。さて、地球滅亡の日まで、ドッジとペニーは？

<主流は「家族と共に過ごす」だが、ドッジは？>

あと3週間で地球滅亡というとき、あなたはその時間をどう過ごす？そんなアンケートをとっても、どこまで本音の回答が集まるかが疑問だが、スカファリア監督はそんな場合の主流は「家族と共に過ごす」と設定した。そのため道路は車で渋滞しているらしいが、こんな時に妻が何も言わず去ってしまったドッジはえらく落ち着きはらって普段どおりの生活を送っているから、その姿にビックリ。さらに驚いたのは、ドッジの家に毎週掃除に来ている家政婦のおばさんが、ドッジの好意によって「もう来なくていい。自分の好きなようにしたらいい」と言われるとひどく悲しみ、逆に「今の話はなかったことにして」と言われるとひどく喜ぶこと。これは社会情勢に無関心なある種の集団に対するスカファリア監督の皮肉かと一瞬勘ぐったが、全体を通して観ていると、どうもそうではないらしい。

本作は中盤からドッジが昔の恋人だった女性オリヴィアを訪ねるロードムービーになるが、これは地球最後の日が避けられないなら、せめてその日は家族と共に過ごしたいという主流派の意見とドッジの意思がたまたま一致したため？それはともかく、そもそも私は地球滅亡の日に向けて「家族と共に過ごす」という考えが主流だということ自体に異議がある。旅の途中において、酒やドラッグに溺れる人たちの姿もたくさん紹介されるから、決してスカファリア監督は自分の意見を押しつけてはいないが、『メランコリア』で見たラス・フォン・トリアー監督の広大な世界観に比べると、本作に見るスカファリア監督の世界観はちょっと狭すぎるのでは？

<このヒロインのキャラをどう評価？>

『危険なメソッド』（11年）では、顔をゆがめ身体を引きつらせるヒステリー症の患者役を驚くべきシリアスさで演じたキーラ・ナイトレイが（『シネマルーム29』121頁参照）、次回作『アンナ・カレニナ』（12年）では、『つぐない』（07年）（『シネマルーム19』306頁参照）や『ある公爵夫人の生涯』（08年）（『シネマルーム22』122頁参照）に続いて美しいドレス姿で登場し、悲劇のヒロインを演ずるから大いに楽しみ。その合間の本作で、キーラ・ナイトレイは自由奔放で何ともはじけたコミカルなペニー役に挑戦しているが、さてその成否は？ネット上では「新境地を開いている」という好意的な意見もあるが、さてあなたは？

本作がロードムービーとして成立するのは、ひよんな偶然で知り合った隣人同士のドッジとペニーが、暴動が起きた街から一緒に脱走することになったためだが、そこに至るドタバタ劇が私には少し作画的に見えて仕方がない。まず、ペニーがドッジと言葉を交わすことになったのは「最後の飛行機に乗り遅れたためイギリスの両親に二度と会えなくなった」と嘆いているペニーを、ドッジが優しく部屋に招き入れたため。そして、暴動が起きる中、ドッジが早く逃げるようペニーに伝えるにいくと、なぜかペニーの家にはドッジに宛てた郵便物の束があり、それをペニーから渡されるとその中にはドッジのかつての恋人オリヴィアからドッジに宛てた手紙も。そんな手紙が来ていたのなら、なぜ早く僕に見せてくれなかったの？街から脱出するのにお気に入りのレコードにこだわるペニーが少しヘンなら、同居している彼氏をペニーが途中で捨ててしまう（？）のも奇妙。しかし、とにかくここから始まるペニーの車に乗ってのロードムービーが本作のメインストーリーになっていくから、後半はそれに注目だ。

キーラ・ナイトレイ演ずるペニーは前半ではケツタイなキャラが目立ったが、さて後半は？オリヴィアを訪ねる長い車の旅の中で、2人で過ごす時間が増えれば、ひょっとしてそこから新たなロマンスが生まれるかも・・・？

<地球滅亡まであと△日、でも君と2人なら・・・>

ペニーがドッジに車を提供したもともとの理由は、「知人が自家用機を持っているので、僕をオリヴィアのところまで車で送ってくれば、君をイギリスの家族に会わせる」とドッジが持ちかけたためだが、ペニーがこれをまともに信用したかどうかは不明。ところが、後半からのロードムービーの展開の中でジェット機の話が本当だったことがわかるから、これによってドッジの信用が一気に高まったことはまちがいない。ジェット機を持っていたのはドッジの父親だったが、ドッジが途中の目的地をそこに設定したのは、ドッジが父親との間にあった「ある確執」を乗り越えて父親と再会しようとしたためだ。ドッジの突然の訪問に父親は嬉しそうだったか、さて、大きな確執を持つ父と息子のその後の展開は？

LPレコードはもとより、レコードプレイヤーやハーモニカなどの小道具の使い方は女性監督特有のきめ細やかさの表れで、ロードムービーの進行につれてほのぼのとした温かさがスクリーンいっぱい広がってくるのがうれしい。しかし、そうこうしている間にも地球滅亡の日が刻々と・・・。しかもラスト近くには、予想より早くマチルダが地球に衝突するとのニュースが発表されたうえ、テレビのニュースキャスターもこれが最後の仕事になると伝えていた。いよいよ地球の滅亡の日が間近だ。しかし、これまでの旅の中で2人の絆はしっかり結びついてきたから、身体の関係ができたかどうかはこの際関係なし。「地球の滅亡」＝「人類の滅亡」は恐い。でも、君と2人なら・・・。

2013（平

成25）年1月22日記